
異世界召喚記 俺はあなたの召喚従！？

Kazuma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界召喚記 俺はあなたの召喚従！？

【Nコード】

N4627F

【作者名】

K a z u m a

【あらすじ】

ある日、俺はイチヤついたカップルのように近く、銀河系のように遠い世界へと召喚された。そこは俺の常識を超えた非常識の塊だった。ある時は人と戦い、ある時はドラゴンと交渉し、ある時は少女の機嫌を取るために奔走した。そんな剣と魔法と少女と俺の殺伐とし「殺伐としてなんかないですよ！？」……次元を超えた愛と勇気の物語かも知れない「言いきって下さい！？」

第壱話 限りなく遠い世界へ―説明は死亡フラグ―

朝、それは一日の始まりを意味する。

目を覚まし、カーテンを開ける。

新聞を玄関に取りに行き、片手間にパンを焼く。

朝食を食べ終え、太陽を目に収めようと窓を開け空を見る。

空の様様は見事な茜色に染まり、太陽は今にも地平線の向こうへと沈みそだった。すぐ近くには学校帰りなのか、また明日ねー、と手を振りながら別れを告げる小学生の集団が見える。

俺はこの感動を誰かに伝えるべく口を開く。

「なんてきれいな日の出なんだ…」

「もう夕方じゃこのアホンダラーッ!」

この美しい景色を全身で感受していると、窓の外から声が聞こえた。

窓の外、つまりは部屋の外、向かいの道路から突然罵声を浴びせてきたのは、近所のツルペタ少女だった。ツルペタとは小学校からの付き合いになる。俗にいう幼馴染とかいう存在だ。今では同じ学校のクラスメイトで正直言って面倒な学級委員長にクラスアップしている。そんな彼女を一言で表す言葉が　　ツルペタだ。

「ツルペタゆるな」

「俺はそんな事は言っていないぜ。考えはしたが」

うがー、と空に向かって叫び声を上げるツルペタ。彼女は時々奇行に走る事がある。そんな時は生暖かい目で見守るのが最近のクラスのルールだ。

しかし、もう夕方か。どうやら寝過ぎたようだ。

「今日学校に来てないから心配して様子を見に来てやったら…、あんたは何をやっているんだーっ！」

「ん？ 寝坊だが」

開き直るなーっ、と再び空に向かって叫ぶツルペタ。確かに今日は金曜日。だがしかし、過ぎたものはしょうがないと思い、開き直すことにした。

所で彼女はご近所の視線が辛くは無いんだろうか？見てて非常に面白いのだが、いつご近所の視線がこっちに向くか解らないので、仕方なしにツルペタに家にかかる様に声をかけた。

「おい、ツルペタ。俺を心配して来てくれたんだろ？ このまま帰らせるのは俺のポリシーに反する。茶の一杯でも用意しよう」

もちろん出廻らしたが、と心の中で付け足す事は忘れない。
するとツルペタは。

「え、あ、うん。じゃあ、お邪魔…します」

と、俺が家にながって行けと言った事実が意外だったのか。呆けた声で返事をした。しかし、アパートの階段に向かって一步を踏み出し、歩き始めたその時、ツルペタの叫び声がご近所に響き渡った。

「って、さりげなくツルペタって言うなあああああっ！！！！」

もちろんご近所の目が俺に向かったのは言うまでもない。

「じゃ、私は帰るけど…後で先生に電話でも入れときなさいよ？
先生も一応心配してたみたいだから」

まあ、先生のことだから忘れているかもしれないけど。と小声で付け足すツルペタ。我がクラスの先生はなんというか…物忘れが激しいのだ。自分の授業を10回に7回は忘れるし、この間はテストの監督をやる際に、肝心のテスト用紙を忘れたこともあった。

それでも先生の評判は悪くない。むしろ生徒に相談されたりと評判のいい方だ。友人のZ君曰く、先生はお母さんみたいだ。と、豪語していた。ちなみにZ君は生粋のマザコンである。彼のお母さんが心配である。

「分かった。後で連絡でもしておこう」

なんて返事をしながら俺も外へ出かける準備をする。

「あれ？もしかして送ってくれるの？」

「別に送らなくてもツルペタなら大丈夫だろ」

「なっ!？」

ツルペタだからな。と付け足すと、ツルペタは顔を真っ赤にした。

そんなツルペタをスルーし、ジャケットを羽織る。

今の季節は秋、半袖で外に出るには少し肌寒い季節だ。かといって長袖を着るほど寒い訳でもない。一番中途半端で俺が最も嫌いな季節だ。

何か叫んでるツルペタをあしらいながら家を出る。太陽が隠れ、微かに明るい町中をツルペタを伴って歩く。

「でもこんな時間にどこ行くの？」

今は落ち着いて、静かに横を歩いていたツルペタが当たり前な質問をしてくる。それに対し俺は、別に隠す必要もないので行き先を告げた。

「駅前のラーメン屋だ。流石に腹が減ったんだよ」

するとツルペタは意外にも、あーあその炒飯おいしいよねー。と話に乗ってきた。って、ラーメン屋でラーメンを評価せず炒飯を評価するだどっ！？ …こいつの評価を改める必要があるな。もちろん下方修正だ。

そのまま炒飯について熱く語っていたツルペタをスルーしていたら駅へ行く分かれ道へと着いてしまった。ちなみに左の道に行けばツルペタの家に着く。

このまま話を続けるとツルペタが着いて来そうな勢いだっただため、ツルペタと強制的に別れる事にした。ラーメン屋で炒飯しか頼まんな奴と一緒に食べる気はないっ。

「ツルペタ、駅はこつちだからお前とはここで別れだな」

「あ、じゃあ私も「じゃあな」ツルペタ！ また月曜日に、だぜっ行くよ」

俺はツルペタの言葉を聞く前に一方的な別れの言葉を告げ、ひたすら走った。人、これを戦略的撤退という。

ツルペタと別れて最初の曲がり角を曲がったところで、後ろから獣のような叫び声が聞こえた。具体的な内容は割合するがツルペタがご近所に痛い子に認定されたのは間違いない。ちなみに俺は初めて会ったときからこいつは痛い子だと確信していた。

「……あいつのことだ。きっと駅前のラーメン屋に先回りしているはずだ……」

過去に何度か同じような事をした時、ツルペタはいつも俺の目的地で俺を待っていた。そのため、今回は駅前のラーメン屋を諦め、俺は近所のファミレスに向かうことにした。別にあそこでも餃子は食えるしな。まったく、ラーメン屋で食べるなら餃子と決まっているだろう。

そんな事を考えながら、俺は日が完全に落ちる前にファミレスへと向かった。

「うーん、ここの餃子もなかなか」

ファミレスで先ほど食べた餃子の評価をしながら俺は日が落ち切り、街灯が照らす真夜中の道路を家へと向かって歩いていった。

「だがしかし、やはり駅前のラーメン屋の餃子の味には負けるな」

あそこの餃子は天下一品だ。と呟きながら信号が青になるのを待つ。ここの信号は長いことで有名で、朝の通勤する人々には魔の赤信号と恐れられている。是非ともこのネーミングを考えた奴の顔を見てみたい。いくらなんでもセンスがなさすぎだろう。と言言ってやりたい。

それでもここが恐れられている理由はよく解る。まず、近くのガードレールが何かぶつかったかの様に拉げている。さらに近くの電柱には、たくさんの花束が供えてある。極めつけは道路に残った黒いしみ。微かに、本当に微かにだが、まだ赤黒いところも残っている。

簡単にいえば、ここは近所でも有名な交通事故多発現場なのである。

通行する車の数がほかの道路に比べて多い事と、ここを歩いて通勤する人が多いためである。いくら注意を呼び掛けてもここで起こる事故が減ることは無かった。まるで何かに吸い寄せられるかの様に交通事故は年毎に数を増やしている。

一度、世界的にも有名な外国の心霊能力者がTVの企画でここに訪れたことがあったのだが、その時の心霊能力者は何を見たのか。生放送中に意識を失ってしまった。もちろん、放送は中止。代わりの番組が放送された。その一週間後、国に帰国した心霊能力者は交通事故に遭って死亡した。目撃者によると自分から車に飛び出したそうだった。

それ以来、ここは夜になると人はおろか車すら通らなくなった。事故も減り、警察としたら万々歳だろう。

……まあ、延々と語った訳だが、俺はそういう話は気にしない性質だ。だから今もこうして噂の現場で堂々と信号を待っている訳だが。

「……本当に人はおろか車さえ通らないんだな」

周り是不気味なほど静かで、それが俺を怖がらせるんじゃなく、逆に冷静にしてくれた。

「……ふう」

完全に日が落ちるといくらコートを着けていても肌寒いものである。そんな事を考えていた矢先だった。

ブロロロロロロッ！

車の走行音があたりに響く。しかしそれは通常の走行音ではなかった。何事かと音のする方へと目をやり、暗闇の向こうからやってきた物の速さに度肝を抜かれた。

「なっ！？」

声を出す暇もないとはこんな状況の事を指すのだろうか。俺に向かつて迫りくるトラックを視界に確認したと思ったら、もうすでに回避が間に合わない距離まで迫っていた。

いったい何キロ出してやがるんだっ！？ と、悪態を吐く暇もなく。俺は目の前のトラックのライトをただじっと凝視していた。

そして、トラックのライトにしては妙に明るい視界の中、俺は自分の最後を覚悟した。しかし、最後の意地で疑問に思った事を口に出す。

「いったいいつ死亡フラグが立った？」

それが俺の地球での最後のセリフだった。

第壱話 限りなく遠い世界へ（説明は死亡フラグ）（後書き）

後書き

ども、K a z u m aです。カズマでもOKです。

本格的なものを投稿するのは初めてです。どうかあたたかく見守ってください。

本作品は長期連載を目指しています。頑張りますので読者の皆様、誤字などがあつたらどんどん言ってください。読みづらいなどの要望があれば今後、努力いたします。

では、これからよろしく願います。

P S

後書きってこんな感じでいいんですかね？

第弐話 限りなく遠い世界で青い飲み物はリンゴ味

「…っ」

激しい光に対し長い間目を瞑っていたような気がする。

恐る恐る目を開けた時目の前に飛び込んできた景色には素敵な美少女とファンタジーな幼女がいた。

……おかしい。少なくとも俺が最後に見た光景はこちらに猛スピードで向かってくるトラックだった気がしたんだが…いつトラックが美少女と幼女に変わったんだ？

「…そうか。これはあれだ。夢だ、夢なんだ。あのトラックも今の状況も夢なんだ。こんにちわ、素敵な夢。さようなら、非現実的な現実」

などと、わけのわからない戯言をほざいてみる。自分でも何を言っているのかわからない。

「えっと、こんにちわ。…夢じゃないですよー？」

夢が返事をした。正確には幼女が、だが。それに驚きつつ、夢だからいいかと納得して所で返事を返すことにした。

「こんにちわ、ファンタジーな少女。これが夢じゃなかったら何が現実だというんだ？」

少女！？ と叫んでいる少女をまるで視界に入っていないかのように今度は素敵な美少女が話しかけてきた。

「少なくともこれは夢じゃない。……と思う」

素敵な美少女はどうやら無口系キャラらしい。俺の好みに直球ストリートど真ん中サヨナラ逆転満塁ホームランだ。

「ますます夢に思えてきた所でああなたの名前を教えてくださいませんか？ 俺は和也、篠原和也」

「…リリカ、アリスはリリって呼ぶ」

これはナンパなんかじゃない。初対面の人にはまず自己紹介が大切だってポチが言ってた。ちなみにポチは実家で飼っているオウムの名前である。

それにしてもリリカ、なんていい名前だ、惚れてしまいそうだ。

「リリカ、いい名前だな。俺の名前よりよっぽどいい」

「…そんなこと、ない。和也も…いい名前」

これはやばい、どれだけやばいかって言うと母に黙って母が大切
にしていた豚の貯金箱をハンマーで叩き割って中に入っていたお金
を見た目普通の貯金箱に移し返した事がばれたとき並にやばい。な
ぜそんな事をしたのか解らないがあの時の俺は豚の貯金箱を目に収
めた瞬間、破壊していた。…その後のお仕置きは思い出したくもな
い。もう少しで何かに目覚めるところだった。

こんなほろ苦い若かりし頃の思い出はどうでもいいとして、もは
や俺の視界はリリカでいっぱいだった。こんなにも俺の理
想にピッタリな人物がいるなんて。…神よ、この奇跡に感謝しよう。
…感謝するだけだが。

ともかくは、この素敵な出会いを神に感謝しつつ、いかにしてリ
リカを攻略しようかと策を考えていたところで。

「あゝ？」

ファンタジーな少女が話しかけてきた。

「なんだ、少女」

また少女って！？　なんて叫びながら顔を赤くするファンタジー
な少女。どの辺りが少女かというと、全体的に少女である。街頭ア
ンケートしたならば100人中94人が少女と答えるだろう。後の
6人はただの変体である。

「なにか用か？ 幼女よ」

とにかく話しかけてきたのは幼女なので聞き出すために声をかける。が、何がショックなのか、地面に座り込み体操座りをしながら小声で「…幼女、私は幼女」と当たり前前のことを繰り返して呟いている。

しかし、何度見てもファンタジーな幼女である。言うまでもないが幼女は幼女だ。だが、その手には幼女の身長の数倍はある杖を持ち、その身を包む服はどこぞの魔法少女のようなローブ姿であった。実にファンタジーな幼女である。

「…アリスは幼女じゃ、ない。…少なくとも私と、同年」

「リリカは何歳なんだ？」

「…16歳」

さりげなく年齢を聞いたことに内心狂喜乱舞しつつ、改めて幼女を見る。名前はアリス、年齢は見た目に反して16歳だそうだと。とても16歳には見えない。

「な、なんですか？」

全身を見られたことが恥ずかしいのか、体をローブで隠しながら

顔を赤くしている。恐らく先ほどの6人がもしもこの幼女を見たならば、今頃あたりは血の海だっただろう。主に鼻血で。

しかし、まあ…

「幼女に年齢は関係ないな」

「ガーン!!」

擬音を口にしながら泣き崩れる幼女。そんなことをするとやはり幼女だと認識を強くする。

しかし、リリカを信じるならばこれは夢じゃないらしい。夢は人の願望が現れるらしい。リリカはともかく幼女が出てくる夢とか…人間として危ない。俺はクラスメイトのD君のようにロリコンではないのだ。俺のタイプはリリカのような凛々しい美少女であって、決してファンタジーな幼女ではない。

…だが一応確認のためリリカに一度確認を取ってみる事にした。

「…夢じゃないのか？」

俺の呟きにリリカは頷くことで同意をした。その凛々しい顔でそんな仕草は反則だと思えます。

俺は今、ホテルのスイートルームのような部屋でお洒落な椅子に座り、これまたお洒落なティーカップで、よく解らない真つ青色をした飲み物を見つめている。

お洒落な机の向かい側では、先ほど会った美少女と幼女。名をリ力と幼女　アリスっていう名らしいが、こいつは幼女で十分だ　　が俺と向かい合う形で同じ飲み物を飲んでいる。

俺はどうしても飲む気がせず、カップを置いて話を聞くことにした。

「…それで、俺はなにがなんだかよく解らないんだが。…その幼女は事態が分かっているみたいだけど」

と言って俺は幼女に視線を向ける。幼女は飲み物にあまり手をつけず、俯いてばかりだ。

「じー」

「あー」

「じー」

「うー」

「「じー」」

「……あー」

ちなみに2回目のじーはリリカである。3回目は一緒だ。
なかなか言い出さない幼女に対し、リリカは優しく後押しをする。

「ほら、アリス。事情を、説明しないと。和也も困ってる」

リリカに言われて覚悟を決めたのか。…何の覚悟か知らないが。
俯いていた顔を上げ、「うげ」……カップに入った青い液体を飲み
干し、真っ直ぐに、視線をこちらへと向けて来た。

「実は……、あなたがいることは、あなたがいた場所ではありません

ん」

「見れば解る」

即答で返事を返す。俺は少なくともこんな飲み物なんか見たことない。むしろこんな色をした液体を飲み物と認めない。まるで絵具を溶かしたような、そこが見えないほど青々とした液体。それを平然と。それが当たり前のように、疑問すら思わず飲み干す幼女とリリ力。

絶対に認めてたまるかつ

即答されたことで流れを断ち切られ、少し困惑していた幼女だったが、気を取り直して話し出す。

「……ここは数ある世界のうちの一つ。『ディカルア』です」

「でいかるあ？」

「発音が微妙に違いますよ。ディカルアは古代語で『理想』という意味を持ちます」

「古代語？」

「……？ 古代語を知らないのですか？」

「古代語も何もディカルアっていう言葉も初めて聞いた。だいたい世界って…どういうことだ？」

「……？」

「……まさか！」

正直に解らない事を言ったらリリカは何を言っているのか解らないといった顔。幼女は声を出して驚愕を露わにしていた。

「そんな…ありえない……。いやいや、そんなはずは………」

その後、幼女は何かを呟きながら自分の世界へと入ってしまった。

「おい、幼女？」

席を立ち、何かを考える幼女の目の前まで行き、手を顔の前にかざしてみるが反応は無い。

対処に困り俺はリリカを見るが。

「……………」

彼女も幼女の変化に対処できていないのか。俺の事を珍しい物を見るように見ていた。……って。

「そこでなぜ俺を見りゆう？」

見られている。という緊張のあまり、見る。で噛んでしまった。それでも目の前の二人は気にしてないらしい。1人は気づいてすらないが。

俺が一人で恥ずかしがっていると。リリカが話しかけてきた。

「和也は、どこから…来たの？」

「どこって…」

日本だが？ と答えようとした所で、突然幼女が立ち上がった。

「そうですっ！！ あなたに聞くのが一番手っ取り早いです！」

そう言つや否や、俺の前までまるで犬のように飛んできると次々と言葉を吐き出す。

「さあ！ 教えてください。天界ですか？ 魔界ですか？ それとも獣界？ 異界？ まさか龍界ですかっ！？」

という感じで。

訳のわからない単語を出されても理解できる訳なく、そんな状態にイライラしてきた俺は、目の前の意味のわからない単語を聞いてくる幼女に対して、でこピンを繰り返した。反省はしていない。

「あうっ！」

「訳のわからない事を聞くなっ」

痛かったのか。おでこを抑え、床にうずくまる幼女。それを心配そうにカップに入った飲み物を飲みながら見ているリリカ。

「とにかく説明しろ。ここの事や今言った世界のこと。どうして俺がここにいるのか。お前たちはなんなのか。全部まとめて10文字で説明しろ！」

「うえ！ 10文字なんて無理ですよ」

若干涙目になりながらあたふたする幼女。そんな光景を見ながら何かを考えているリリカ。

「さあ！ さあさあさあ！！」

「う、う、ふええ」

なんとなく雰囲気で、手を妖しく動かしながら幼女へと迫る俺、それを後ずさりながら泣くまでカウントダウンを始めた幼女。……俺は何をやっているんだろう？

俺はどうやってこの空気を戻そうかと考え、幼女のカウントが残り数秒を切った所で。

「……ディカルアへようこそ？」

見事に10文字でリリカが説明をしてくれた。…説明になってない気がするが。

ともかく、リリカの発言で幼女は呆氣にとられ、俺は。

「いや。まあ、確かにその通りなんだろうけど？」

と、変に納得してしまい、なんだかどうでもよくなってしまったので自分の席に戻り、置いてあったカップの中身を飲みほした。気づいた時にはもう遅く、液体はすでに口内へと侵入を果たしてしまった。液体が俺の舌を蹂躪するかと思ったら。

「あ、うまい」

予想と見た目に反して、リンゴジュースのような味がし、意外と

おいしかった。…しかしやはり見た目に抵抗を感じ、一口飲んで力
ツプを机の上に戻した。

「…なんだか疲れた。なんでもいいからとにかく説明してくれ」

第貳話 限りなく遠い世界で〜青い飲み物はリンゴ味〜（後書き）

後書き

どうも、K a z u m aです。親しみを籠めてカズマでもOKです。
1、2話纏めての投稿です。ここまですがプロローグみたいなものです。

ここから主人公『篠原和也^{しのはらかずや}』の物語が始まります。キャラ紹介などはある程度キャラが出揃ったら投稿しようかなって思ってます。
では、

次回！

「続・限りなく遠い世界で〜『理想』の世界〜」
です。お楽しみに！

第参話 続・限りなく遠い世界で『理想』の世界

「…なんだか疲れた。なんでもいいからとにかく説明してくれ」

俺のこの一言で何もされない事と自分がやるべき事を理解した幼女は。

「…ごほんっ！ えーっと？ どこまで話しましたっけ？」

と、誤魔化すように話を再開した。……無かった事にする気だな？

「話したって言うか…、そうだな。とりあえずなんで俺が『ディカルア』にいるのか詳しく説明してくれよ」

俺はリリカに青い飲み物のお代わりを頼みつつ、まずは現状を把握する事にした。トラックに轢かれたと思ったら知らない所に移動してました。……洒落にならん。

「それもそうですね。……まずはあなたに謝らなければいけません
…」

謝る？ 俺に？

「私のミスで召喚事故が起きてしまったんです。通常、召喚事故を起こした場合、召喚はキャンセルされ、魔力の暴走による爆発などが起きるのですが……。なぜか爆発せず別の物を召喚してしまったんです」

「……それが、俺って訳か」

そう聞くと、少女は元氣なく頷く。意味もなくとてつもない罪悪感に襲われたが、それはこの際スルーする。それよりも大きな問題がある。

「……はい、すみませんでした……」

俺が視線を向けていると、どんどんと小さくなっていく少女。どう声をかけようか迷っていた時、リリカがお代わりを持って戻ってきた。

「和也、これ…どうぞ」

「ん？ ああ、ありがとう」

カップを受け取り、一口飲む。やはりおいしいのだが、どうも見た目が受け入れられない。

「じー」

そこまでの行動を終えてから少女に視線を向ければ、少女が俺の顔を食い入るように見ていた。…デジャブだ。

「…なにか？」

「貴方の名前を教えてくださいませんか？」

「俺？　そう言えば、お前には言っていなかったな。俺の名前は和也。
しのはるかすや
篠原和也だ」

そういつて俺は少女に対し、自己紹介を済ます。どうでもいいことだが、今の今まで少女は俺の名前を知らず、俺は少女を名前で呼ばずにいたのか。

「カズヤ？　珍しい、というより聞いたことのない名前ですね？」

「失礼だし初対面だから聞いたことがないのは当たり前ですけど？」

あまりにも失礼な言い方にちょっと威圧感を籠めながら言い返す
と。

「ひっ!？」

小さく悲鳴を上げリリカの背後へと逃げてしまった。

「……和也。アリスを、あまりいじめちゃ、ダメ……」

「いじめてるんじゃない。弄くってるんだ」

「どこが違ってますかっ!？」

そう言って笑う俺、叫ぶ少女、無表情なリリカ。

……ここにプチカオスが誕生した。

「まあ、召喚だかなんだかよく分からんが。そんなに、むしろ怒ってないから安心しろ」

「ほ、ホントですか!？」

「ああ、俺も命を助けて貰った立場だしな」

そう、もしこの少女の言う通り、俺が召喚とやらでここにいるのなら、俺は命を助けられた事になる。

「ほえ？ 命を助けた？ 誰が、誰の？」

召喚されたとするならば、俺が最後に見た光景。つまり、暴走するトラックが俺に衝突する直前に召喚された可能性が高い。つまり、もし俺がここに召喚されてなかったら俺は死んでいた。かも知れない。

「あゝ、どういことですか？」

「ん？ ああ、幼女が気にすることはないさ」

へー、そうですか。ってまた幼女！？ と言ってる幼女は置いとき、俺は自分が召喚されたこと『ディカルア』について考えた。

「なあ、ディカルアってどんな所なんだ？」

知らない事をいくら考えても仕方ないので、俺は幼女にここ『ディカルア』について聞くことにした。

「え？ あ、はい。『ディカルア』についてですね」

……………長つたらしいので省くが『ディカルア』とは古代語で古代語とはその名の通り、遙か昔の文明で使われていた言葉らしい理想を意味するらしく、人にとって常に世界が理想である

ように、と言う願いが籠められているらしい。

そして俺が今いる建物を含めて、窓の外に広がる町は全て総じて『ディカルア』らしい。……おいおいおい、どんだけ広いんだっつーの。

さらに、一番衝撃だったのは。

「浮いている？」

「はい、『ディカルア』は浮遊大陸なんです」

らしい。原理は知らないが、『ディカルア』は空に浮かんでいるそうだ。…川の水はどこから湧いているんだろうか？

ここまできて再認識する。

「ファンタジーだ……」

俺のいた世界ではこんな話は誰にも信じてもらえず、話したら話したで笑顔で病院を進められるだろう。

そんな事はおいといで、『ディカルア』については大体理解した。しかしまだ疑問がたくさん残っている。

次に俺が幼女に質問したことは。

「召喚術についてですか？」

である。それはなぜか、……だつて男の子だもん。興味を持ててしまうのは仕方ない。魔法とか懂れないか？

「えーっと。じゃあ基本的な事について説明しますね」

そう言つと少女はどこからか黒板とチョークを取り出し、説明を始めた。

「まずは、世界について説明しますね」

そう言つて黒板にディカルアと書き、それを円で囲む。

「まず、ここが私たちのいる世界です。そして……」

次にまたしても黒板に、今度は天界・魔界・獣界・異界・龍界と書き、その全てを円で囲む。

「これらが私たちのいる世界の他に存在する世界です。これらの世界からその世界の生き物を召喚する事を召喚術と言います」

衝撃的な事がまた判明した。どうやら世界は一つではないらしい。

「さらに細かく説明するとですね、生物を召喚することができる者を召喚使と呼びます」

「ん？ その言い方だと生物以外にも召喚することができるのか？」

「はい、そうなんです。例えばですね……リリ、お願いできますか？」

そういつて幼女はリリカに何かを頼みこむ。

「ん、解った」

了承したりリカは右手を前へ突き出し、何かを呟いた。

すると次の瞬間、リリカの手には刃幅が大体3〜5cm、刃渡りは地面から目の前にある机くらい長さ、約60cmくらいの西洋剣が握られていた。

「おおおー」

思わず感動する。幼女いわく、召喚したい物に専用の刻印を刻み、キーワードを言葉にするだけで召喚を可能にする誰にでも扱える召喚術らしい。

「なあなあ！ それって俺にも出来るのか！？」

後に効いた話だが、リリカ曰く、この時の俺の眼は太陽のように輝いて見えたらしい。

「うーん。できるんじゃないですか？ 素質が必要とか、そんな術ではないですから」

思わずガッツポーズ。この時だけは少女に感謝した。俺を召喚してくれてありがとう。

……ん？ 所で俺はどこから召喚されたんだ？

「なあ、少女。俺っていったいどこから召喚されたんだ？」

教えてもらった世界の中で該当しそうなのがあまりないんだが……そう聞くと少女はまるで時間が止まったかの様に停止した。しばらくして動き出したと思ったら、少女は下を向いてプルプルと震えだした。

「……………です」

「ん？ なんだって？」

あまりにも幼女の声が小さくて聞き逃してしまった。

「もう一回言ってくれよ」

「解らないんですッ!!」

今度ははっきり聞こえた。しかも若干涙目で叫ぶ幼女。

「あなたがどこの世界から! どのような方法で! なんで私が召喚できたのか! 何一つ解らないんですッ!!」

もう必死である。こんなに必死になられたら、逆にこっちがまいつてしまう。

「あー……。とにかく落ち着け。な? な?」

俺の言葉に落ち着いたのか、カップに入っていた飲み物を飲もうとして中身がないのに気づき、リリカにお代わりを頼んだ。

「……すみません」

「いやいや、こちらこそすいません?」

なぜか俺が謝ってしまう。昔からこんな雰囲気には慣れていない。むしろ苦手だ。

これも母のせいだ。母は昔から俺に泣き落としという高等技術を使っていた。しかもただの泣き落としじゃない、例え母に対し俺が有利な立場にあったとしても、それを使用するだけで流れが変わりいつの間にか母が有利な立場に回っているという、全てにおいて計算され尽くした泣き落としなのだ。今思えばなぜ母親が息子に対し泣き落としなんか使うのだろうか？ いろいろとおかしくないか？

まあ、そんな事は置いて。こんな理由によって俺は、泣いている異性を見たら例えそれがどんな状況においても謝ってしまうという、嬉しくない条件反射を身につけてしまったのだ。

「……？ なんであなたが謝るんですか？」

「え、えーっと？ なんとなく？」

条件反射です。なんて言ったらどんな目で見られるかは経験済みな俺は、とにかく誤魔化すことにした。

…もつとも、よく考えれば俺の説明も誤魔化せてない気がする。むしろ正直に言った時と結果が変わらない気がするんでせうが？

「……ふふ」

「えっと…ですね、なんとなくというか仕方なくというか条件反射というか……ってあり？」

俺が一生懸命弁明をしようとした所（自爆ともいう）少女はいつの間にか泣くのを止めクスクスと笑いだした。その笑顔は誰も触れない。いや、触れるのを戸惑ってしまうほどの芸術品と表現してもおかしくないほどの可憐な笑顔だった。

……だが、見た目幼女なため、俺には何の意味もなさなかった。もしかしたらそっち系統の人には需要があるかも知れない。主に我がクラスのZ君とか。

「ふふ、あなたは不思議な人ですね」

「……失礼な。何を根拠に俺を不思議系キャラに認定しようとする？」

俺の返答にさらに笑みを深くする幼女。：ム力ついてきた。

これがリリカのような美少女だったら俺は恥ずかしがっていたかもしれないが、相手が幼女だと馬鹿にされているようにしか思えん。

「……ていつ」

「ふふふって痛っ！」

例え、誰に何かを言われようが俺は俺の行動が正しいと信じている。だからそんな目で睨むな、幼女よ。

「な、何をするんですか!？」

「でこピンだ。知らないのか？」

「知りません! それよりもいきなり人の頭をはじくなんて何を考
えているんですかつ!？」

「別に、何も考えてなんかないさ。ただムカついたからやった」

「どんな理由ですかそれ!? むしろ理由にすらなっていないじゃな
いですか! あなたは子供ですか!！」

「（ピクツ）…何を言うか。幼女のくせに」

「なあッ! そ、そ、それは関係ないでしょう!？」

「ふふん。どっちが子供だか他人に聞けば一発で解るんじゃないか
?」

「くう、人が気にしていることをッ!? それに私は幼女じゃあり
ません。これでも16歳ですッ!！」

「どうだが、それに今これでもと言ったな? つまりは自覚はある
んだな」

「……………アリス、お代わり、持って来たよ?」

俺が幼女と言い合いをしていた時、カップを持ったりリリ力が帰っ
てきた。おかげで幼女との言い合いが止まってしまった。…むう、

楽しかったのに。

カップの数は二人分。どうやら俺の分まで淹れてくれたようだ。やっぱりいい子だなー。と俺が感動していた時、幼女が何かを言いたそうな顔をしていたが俺はスルーした。

「あのですね。あなたは誤解しているようですが私はこれでも16
「なあ」歳……なんですか？」

若干不機嫌になりつつも返事を返してくれる幼女。楽しい事は楽しいのだが問題の先送りはいかんと思うのよ？

「とにかく解らない事だらけなのは解った。それは今は置いて、俺は、帰れるのか？」

そう、問題はそこである。

先ほど幼女は、俺がどこから来て、どうして召喚できたのか解らないと言っていた。

それはつまり、まったくの偶然で俺はここに召喚された事になるんじゃないのだろうか？

俺がその疑問を問うてみたところ、どうやらその通りのようだ。

「和也さんは本来、失敗するはずの召喚術によって召喚されました。」

「……本来ならば召喚術は、契約をすることにより成り立ちます。」

「契約？　なんだそれ」

「契約とは…簡単にいえば、召喚をする前に対象に対し呼びかけ、対象を召喚するに相応しい実力の持ち主であると認められれば、対象が召喚に応じる。これが大雑把な召喚術の仕組みです」

……ようはあれか。「私に召喚されてください」「お前は俺を召喚するに相しいな。合格」「やったー。召喚成功」ってな感じか。

「ですが……あなたの場合はこの契約がされておらず、失敗によって召喚されました」

「それになにか問題でもあるのか？」

「……大有りです。普通は契約によって召喚者は召喚従の事を理解し、召喚従は召喚者の力となることができるのです」

「ですが、私はあなたと契約をしていないため、あなたの事が何一つ解らない…。あなたの事が解らなければあなたが住んでいた世界の情報も解らないんです………」

「えーっと、それってつまりは？」

「あなたを送り返すにはあなたの世界を理解しなければできません。だから、今の私にはあなたを送り返す事が出来ないんです……」

その言葉に、何もできない自分が悔しいのか掌をギュッと握りし

め俯く幼女。

そしてそれをなんとも言えない表情で見つめる俺とリリカ。
こんな時、当事者の俺が言葉をかけてもそれは逆効果だろう。
もし俺が声をかけたとしたら…。

「まあ、俺もそんな気にしてないし落ち込むなって。な？」

「あなたが気にしてなくても私が気にするんですッ！！」

ってな感じで。さらに落ち込むのは誰が見ても明らかだろう。

まだ会って数時間しか経ってないが…、あれは失敗を自分一人で抱え込むタイプだ。そういうタイプに限って思考はマイナス方向への無限ループにハマリ、いつか自滅するのだろう。

……俺の親父が、そうだったように。

ちなみにそれは過去の話で今では父母そろってスーパーウルトラデンジヤラスポジティブ（自称）だ。

…そんなどうでもいい家庭事情は置いといて。

今は現状を打破するのが最優先事項だ。軍曹、なにかいい案は無いかね？ いいえ！ 何も思いつきません。大佐！ そうか、ならば軍曹。君は巨人ファンに囲まれながら六甲おろしを歌ってきたまえ。イエッサー！ 所で大佐、六甲おろしとはなんですか？ …そこからかね。軍曹。

……なんだ今の俺の思考は？

「……カズヤ」

「ん？　なんだ、リリカ」

しかし、大佐と軍曹について考える前にリリカが話しかけてきた。

幼女は依然として俯いたままだ。

「カズヤは、なんで怒らない？」

「怒るって…、何に対して怒ればいいんだよ」

俺の返答に困惑しながらも言葉を続けるリリカ。

「…だって、カズヤは帰れないかも、知らない」

「そりゃあ、そうかも知れないけど…」

けどな、と言って俺は続きを話す。

「さっきも言ったが、俺はアリスには命を助けられた形になるんだ。いくら帰れないからといってさ、命の恩人に対して感謝はすれど怒るなんて、出来る訳ないだろう？」

俺のポリシーにも反するしな。俺がそう言い切ると、リリカもだが…俯いていた少女が顔を上げ啞然とした表情でこちらを見ていた。

「そうだ。そういえば言ってなかったな」

「え？ 何をですか？」

「……………」

二人して疑問顔になる。当たり前だ、これは俺がこっちに来る前の出来事に対してなのだから。

「少女、お前が俺を召喚してくれていなかったら、俺は今頃ハンバーグになっていただろう」

ハンバーグに、の部分でさらに疑問顔になった。……………もしかしてハンバーグを知らないのだろうか？

それはいけない。あんな素晴らしい料理を知らないなんて！ どうか教えよう。

と、決意したことは今は置いて。…ついでに少女が少女と言った事に反応したこともスルーするとして。
今は言葉の続きを話す。

「だから、……………だから。ありがとう」

今俺が持つありったけの感謝の意を籠めて、相手にこの気持ちが届くようにと想いを籠めて。

俺は感謝の言葉を紡いだ。

…ほんとなら、これじゃあまだ足りなくらいだ。だって命を助けてくれた相手だぜ？ 言葉だけで終わらせてはダメだろ。

「……………あなたは、ほんつつつとーーーーに、不思議な人です」

「……………アリスに同感」

「ちょ、人が感謝しているだけなのになぜそんな対応！？ ひどくないっすか！？」

俺の想いはどうやら届かなかったようだ。俺の想いを利子付けて返せってんだっ。

せつかく俺が滅多にやらない事をしたって言うのに…。しかも幼女に対して。

ん？ 不思議な事にどんどんムカついてきたぞ？ あれか？ もしかしてこれが殺意ってやつなのか？

「ふ、ふふ、ふふふふふっ」

「ふ、ふえ！？ なんですかっ！？」

「幼女よ、もはや何も言うまい。黙って俺のスーパーウルトラデンジャラスな必殺技を喰らえッ！！」

「ふええええええっ！！？」

「…………アリス、頑張れっ」

「え？ リリ？ なんであなただけいつの間にか距離を取っているんですか？」

ガシッ

「捕まえたぞ、幼女よ」

「……あの……。一体私は何をされるんでしょうか？」

「……ふっ、ここから先はR指定だ。（主にスプラッター的な意味で）」

「……………助けてー！！！！」

「……………アリス、頑張れっ」

「ふははははははげほっごほっ。……ごほん。さて」

「……………なんだかすごく台無しな気がします。そしてリリ！ あなたも少しは助けて下さい！！」

「……………やだ。巻き込まれたく、ない。……大丈夫。アリスの事は、忘れない（黙祷）」

「ひどっ！！ ……っていうか人を故人みたく扱わないでくださいっ！

？（泣き）」

「覚悟はいいかね？ 幼女よ（警察に通報される笑み）」

「あの！ えっと、その。……………優しくしてくださいね？」

「却下」

「ふえええ！！ 即答ですか！？ 美少女のお願いですよ？」

「お前は幼女だ。反論は認めないし、幼女は俺のストライクゾーンから外れている。だから安心しろ」

「…安心って、何に対してですか？」

「躊躇わないから」

「私は一体何に対して安心すればいいんですか！？」

「……………アリス、生きてっ」

この日、リリカはアリスに対し黙祷し、俺はアリスに対してR指定。（スプラッター的な意味で）な行動をとり、アリスはアリスで建物中に届くような声で悲鳴を上げた。

こうして、俺の異世界での幼女と美少女とのファーストコンタクトはカオスによって始まった。……………先が不安であるが、楽しいから

良しとしよづ。

「……………ところで、アリスは？」

「ん？ 幼女ならその隅っこで丸くなっているぞ？」

「……………おばけ怖いお化け怖いお化け怖い× リピート」

「…何を、したの？」

「別に、ただ俺の世界で有名な怖い話をしただけだ。流石にスプラッターは止めた。あれでも命の恩人だからな」

「……アリスは、幽霊とかが凄く苦手。…だから、その手の話はなるべく、ダメ」

「なるべくつて事は…たまにならいんだな？」

「……………たまになら」

「（ビクッ！）……………お化け怖いお化け怖いリリが怖いお化け怖い」

「……やっぱり止めとくわ」

「……それがいいと思う」

第参話 続・限りなく遠い世界で『理想』の世界（後書き）

ども、カズマです。K z u m aとも呼びます。

忒話から見て下さっている方は遅くなっています。忒話から続けてみて下さった方はありがとうございます。ずいぶん遅くなりましたが、第参話です。

今回は説明編です。なぜ主人公が召喚されたのか、などなど様々な謎について説明しようと思っていたのですが……なぜか説明しきれませんでした。それに話もあり進んでないような（汗）

それはともかく、いかがでしたでしょうか？ 皆さまが面白かったと思ってくださればカズマは大変うれしく思います。

なにか誤字脱字、ここが面白かったなどのご意見ご感想があればどんどん言ってください。カズマのやる気が大気圏突破します。

では、次回は第4（漢字わかんね）話「続・限りなく遠い世界で『異世界は現代っ子には厳しい』」をお送りいたします。

提供はK a z u m aことカズマでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4627f/>

異世界召喚記 俺はあなたの召喚従！？

2010年10月12日03時52分発行